

## 新潟医療福祉大学図書館における利用者サービスについて

新潟医療福祉大学図書館・学習支援課

星名 孝修

### 要 旨

2001年に開学した新潟医療福祉大学は、看護・リハビリ・医療・栄養・スポーツ・福祉の総合大学として2018年4月に6学部13学科の構成となる。大学図書館は開学来、学術雑誌(近年は電子ジャーナル)、二次資料としてのデータベース、ナビゲーションツールとしてのリンクリゾルバを導入し、学術情報の発見から入手までの環境を整備してきた。中でも電子ジャーナルパッケージ「メディカルオンライン」「Medical Finder」の活用が目立つ。利用者サービスに関して、学部生に対しては1年生の「オリエンテーション」および『基礎ゼミ』時の「図書館利用ガイダンス」では基本的な図書館の利用法を教授している。卒業研究を控えた3・4年生向けには二次ツールを使用し、の先行研究調査やILLなどの「文献検索ガイダンス」を実施している。授業科目の中に組み込まれている場合もあるが、対象者や要請によっては範囲や難易度までも考慮した内容で行なっている。

キーワード： 大学図書館 電子コンテンツ 利用者サービス

### I はじめに—本学の概要—

2001年に新潟市北区に開学した新潟医療福祉大学(以下、「本学」と称する)は、看護・リハビリ・医療・栄養・スポーツ・福祉の総合大学として保健・医療・福祉・スポーツ分野の専門職を養成している。開学時の5学科から現在は4学部12学科、学生の総数は4千人を超えた。2018年4月には「診療放射線学科」の新設と改組を行い、6学部13学科となる。建学の理念として「優れたQOLサポーターの育成」を謳い、教育の特色として「チームアプローチ」「連携教育」の実践を掲げている。

### II 本学図書館の概要

このような大学の一組織として本学の大学図書館では、開学来、当該分野の専門資料の収集と提供を行なっている。中でも、医療系であることから学術雑誌の収集に予算の重点配分を行なってきた。近年は電子コンテンツの整備を進めている。

本学図書館は正門近くに位置し、開学時の5学科を象徴する五角形の屋根を有する3階建ての建物である。昨夏、3階部分の大講堂(教室)を閲覧スペースに改修する工事を行うことで建物1棟が図書館のスペースとなった。1階は入退館ゲートおよびカウンターのほか、ブラウジング雑誌や新聞、プリンターなどが設置されている。また改修の目玉としてラー

ニングcommons(以下「LC」と称する)としてグループ学習が可能なスペースが広がっている。2階は中間層として図書・雑誌などの資料を配架した。3階は先に述べたように個人で学習する閲覧スペースであり、上層階に向かうほどに静寂を保つようにフロア単位でのゾーニングを考えている。

改修に際しては、数学や物理、解剖・生理学など専門科目の基礎をサポートする「学習支援センター」をLC内に誘致した。ここでは授業期間の日中に専門の担当スタッフが常駐し、いつでも質問を受け付ける人的サポートを行なっている。またLCには可動式の机やホワイトボードなどグループ学習が可能な什器が設置されており、学習支援センターのセミナーが開催されるほかに、イベント時以外は予約なしで自由に使用できる。そこでは一つの症例に対して各専門職種を学ぶ複数学科の学生が治療方針を検討するなど、本学の教育特色であるチーム医療の象徴的な場所として、グループワークやディスカッションが活発に行なわれている。

入館者数は、開学時に5学科からスタートして以来約10年間是新設学科や大学院の設置など大学規模の拡大が続いたこともあり、緩やかな右肩上がりの状況であったが、2009年の20万人超えをピークにここ数年は横ばいの状況が続いている。大学規模の拡大に図書館のキャパシティが限界であったこ

と、学生の居場所として食堂やラウンジが整備されたことが要因と考えられる。しかし昨夏の改修によって床面積の拡大、閲覧席の増、LC効果もあってか2016年の入館者数は対前年比108%の215,938人、2017年の上期は128%となった(図1)。

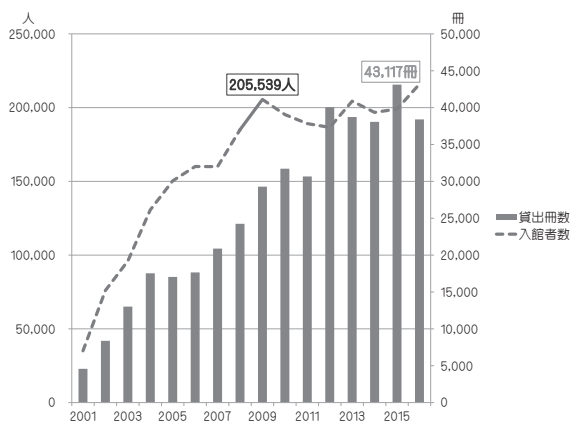


図1 入館者数・貸出冊数推移

貸出冊数もここ数年横ばい状態である。入館者数の伸び悩みと同じ要因が考えられるが、スマートフォンの普及など情報を取得する環境の変化、娯楽としてのゲーム機やYouTubeの普及なども要因と考えられる。近年は学生の図書館活用を教員へ働きかけること、図書の表紙など見せる展示の促進、季節や学事に関連した特集企画、学生を伴ってのブックハンティング(選書ツアー)など、学生の関心を引き起こす様々な取組みを行うことによって何とか横ばいの数字を保っている状況にある。

そのほかの本学図書館の情報としては、蔵書数は約11万冊、重点配備をする雑誌は約1,300タイトルを有する。開館時間は8時45分から22時までである。平日の授業開始が9時であること、大学院の授業終了が21時20分であることから、その時刻を意識して開館時間を設定している。開館日数は年間約300日(去年は改修工事のため290日)で、12月以降は国家試験対策により図書館の開館を期待する声も大きく、年末年始も休むことなく、3月初旬までは土日・祝日も開館している。

さて、ILL(図書館間相互貸借、Inter Library Loanの略称)業務についてである。文献の複写は特に医療系大学図書館業務では大きなウェイトを占める。本学では2006年に4千件を超える受付をカウントしたがその後、電子ジャーナルの普及により各大学で入手可能なタイトルが増加したことを反映してか年々減少傾向にある。依頼については近年、年間2千件程度で推移していたが、直近2年は減少傾向にある。学内コンテンツの整備の中でも特に国内文献のパッケージ契約による好影響に依るところが大き

いと考えられる(図2)。

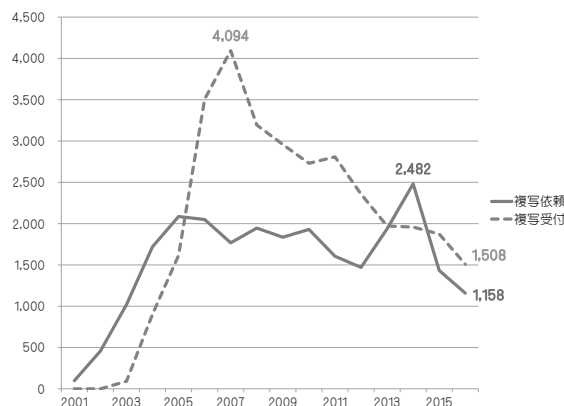


図2 ILL依頼・受付数推移

### III 導入しているデータベースと利用状況

先に述べたように近年は電子コンテンツの整備を進めている。具体的には一次資料としての電子ジャーナルと並行し、二次資料としての文献検索データベースを、また両コンテンツを結び付けるナビゲーションツールとしてのリンクリゾルバも導入し、二次資料から適切な一次資料へ誘導すること、また選択肢を提供することを意識している。

下記の表1は本学で契約している電子(デジタル)コンテンツの一覧である。記事検索ツールである医学中央雑誌は同時アクセス数13、リモートアクセスオプションを付加した契約である。パッケージ系の電子ジャーナルはこれまでElsevierやWileyなど外国出版社のタイトルが主要であったが、ここ数年は医学書院の「Medical Finder(略称MF)」や「南江堂オンライン」など国内のタイトルも導入している。

表1 本学契約のデジタルコンテンツ一覧

記事検索	医学中央雑誌(13)※	CiNii Articles
	CINAHLPlus with Fulltext(3)※	SPORTSDiscus(1)
	PubMed	MAGAZINE Plus(1)
	最新看護索引Web(3)	SCOPUS※
電子ジャーナル	メディカルオンライン※	Medical Finder(医学書院)※
	南江堂オンライン※	Elsevier※
	Springer※	OUP※
	Wiley※	SAGE※
電子ブック	eBookLibrary※	NetLibrary
	メディカルオンライン※	Encyclopedia of Neuroscience
その他	簡蔵11(朝日新聞)(1)※	新潟日報DB(1)
	日経テレコン21(1)※	Japanknowledge(1)※
	EndNoteBasic(Web)	JCR(インバクトファクター)
	NIRR(IR:機関リポジトリ)	リンクリゾルバ(SFX)※
	看護師国家試験問題Web(3)	

カッコ内は同時アクセス数 ※印は学外からのアクセス(リモートアクセス)が可能

これら電子コンテンツ導入後は利用統計を毎月取得し、費用対効果やガイダンスの有効性などの測定

を行うことで、契約の判断材料としてサービス向上策に活用している。利用状況としてはElsevierの「サイレンスダイレクト」、国内では「メディカルオンライン（略称MO）」、先に上げた「Medical Finder」の活用が目立つ。

主要なパッケージ系電子ジャーナルの閲覧数は2014年の51,196回から2016年では1.76倍の90,045回に増加した（図3）。参考までに記事検索ツールとしての抄録・引用データベース「SCOPUS」は2014年の冬にトライアルから本契約したものであるが、検索回数は2015年度の1,334回から2016年度には5,542回の4.15倍になっている。特に院生や教員には引用回数の多い論文を発見するツールとして好評である。大学全体の海外文献投稿数の推移をみるなど機関の研究業績を測る際にも活用している。

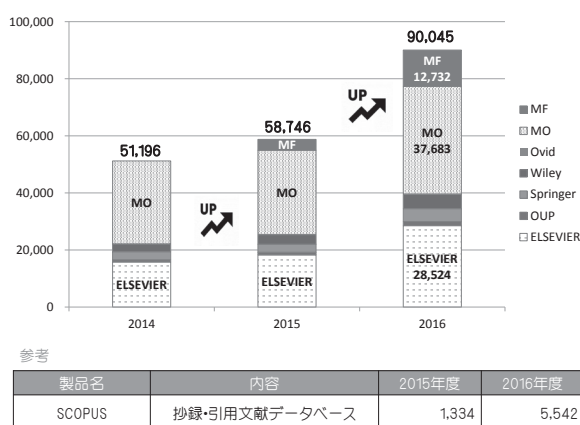


図3 主要パッケージ系電子ジャーナル閲覧数

#### IV 利用者ガイダンスの実施状況

図書館司書として近年意識していることがある。それは、図書館は教育機関である大学の一組織であり、大学の目的である本学であれば建学の理念「QOLサポーターの育成」をすべく大学図書館も存在しており、提供するサービスもコンテンツも、また人的リソースの配分もなされるべきであるということである。いくら高価なコンテンツを導入したとしても活用されなければ、また大学の目的に貢献していないとするならば、ただ単に図書館の自己満足に過ぎない。近年のICT（情報通信技術、Information and Communication Technology）の進歩は多様なコンテンツやサービスの提供を可能にする一方で情報格差を広げているとも考えられ（故にナビゲーションソフトの精度は重要と考える。本学では2017年4月にこれまで契約していたリンクリゾルバを見直し変更した）、これまで以上にいわゆる「利用者教育」「ガイダンス」「オリエンテーション」「講

習会」「セミナー」が必要であると捉えている。しかも、より適切な時期に適切な、また求めに応じた柔軟な内容であるべきと考える。

#### 1 学部生1年生の利用者ガイダンス

本学の利用者ガイダンスのスタートは新入生の全員を対象とした15分のオリエンテーションである。ここでは欲張らず最小限のポイントに絞り、大学図書館が如何に便利であるか、在学中に役に立つかの印象付けを狙いとしている。次の機会は1年生・前期必修科目として“大学生活の適用とマナー”、“大学での学びの基礎の習得”を目的とした『基礎ゼミ』時である。幸いにして『基礎ゼミ』時の図書館ガイダンスは全学科必須として、現在であれば全12学科に向けて1コマ（90分）の図書館活用法を教授している。先のオリエンテーションから間もないとはいえ、高校と大学では学習スタイルが大きく変化することもあり、丁寧にOPAC（オンライン蔵書目録、Online Public Access Catalogue の略称）での所蔵調べから、貸出の延長や予約ができるMyOPACの使用法など、各人のノートパソコンを使用している。先のオリエンテーションから間もないとはいえ、高校と大学では学習スタイルが大きく変化することもあり、丁寧にOPAC（オンライン蔵書目録、Online Public Access Catalogue の略称）での所蔵調べから、貸出の延長や予約ができるMyOPACの使用法など、各人のノートパソコンを使用している。

#### 2 学部生3年生の利用者ガイダンスー看護ー

卒業論文の作成を控えた3・4年生向けには呼称「卒研向け文献検索ガイダンス」を実施している。学科によっては授業科目の中に組み込まれており、毎年1コマないし2コマを図書館職員が担当している。例えば看護学科3年生・前期必修科目（15コマ）の『看護研究方法論』では、研究デザインやクリテイクなどを取り上げるオムニバス形式の授業スタイルの中の7-8回目を「文献検索」と題して演習形式の授業を行なっている。図4はシラバスを基に、どのように授業を進めるかを学生に説明したスライドである。内容としては文献検索の必要性＝先行研究調査の役割を説明した後、原著や総説など文献（論文）の種類について、またその発生と流通についてを前置きとし、その後は書誌について、書誌の読み解き練習、参考文献リストから書誌を題材に本学で該当論文が読めるか否かの所蔵調査（OPAC検索）、また電子ジャーナルAtoZの紹介等演習形式で行なっている。OPACの検索は1年生に教授しているはずではあるが、この時期初めて使用したとする学生も多い。

概して検索の経験・知識が浅いほどに先行研究調査がOPACで事足りるとの誤った認識を持っている。参考文献リストに掲載された論文は大学図書館など一つの機関で全て所蔵しているわけでは

なく、OPACは雑誌タイトルを検索キーワードとして所蔵の有無の検索をするものであることを強調し、この点を「検索の要の考え方」として繰り返し説明している。この理解ができたうえで、先行研究を調べるツールとしてデータベースの医中誌や「CiNiiArticles」、「PubMed」、「CIHNAL」があること、調べた後のステップとして一次資料の在りかを探すべく、冊子体刊行物であればOPACで所蔵調査を、電子であればアクセスの確認として電子ジャーナルAtoZを紹介するという順序である。その後は、電子ジャーナルの特性、外部機関からの取寄せ（ILL）、リモートアクセス、シソーラスを活用したキーワードの選定についてまで言及している。当たり前ではあるが、授業の前後のコマ内容につながりを持たせるべく、担当する図書館職員も学生と机を並べて講義を受けたいという資料作りをしている。

- 看護研究方法論(クリティークを含む)
- 3年生、前期、必修(7-8回目(2コマ連続)担当)
- 講義+検索演習
  - 文献検索の必要性
  - 文献とは(種類、発生と流通、文献検索の流れ)
  - 書籍とは(引用文献読み解き)→所蔵検索
  - データベース紹介、検索実践、シソーラス
  - 電子ジャーナル、相互利用、リモートアクセス

図4 学部生3年次の利用者ガイダンスー看護ー

このような3年生の「研究法」なる授業科目はカリキュラムの見直しが行なわれるタイミングで複数の学科で採用されてきた。現在では理学療法学科、健康栄養学科での同内容の科目が存在し、同様に図書館職員がいくつかのコマを担当している。というのも近年の4年生は就活等で大変忙しく、ましてや本学では国家試験というメインイベントが控えているため、卒研の提出がどんどん前倒しになっていることも理由の一つである。よって卒研指導を早くは3年生の前期に、場合によっては後期に行うのがメインとなってきた。気をもむのは教職員で、そうはいつでも学生が実際に卒論を手掛けるのは4年生それも提出間際に駆け込みで行うことも多く、残念ながら半年間に何の実践も行なわない場合は、教授した内容が全く身につけていないという現実にも何度か直面している。そこは辛抱強く繰り返しである。以下の表2は卒研レベル以上のガイダンスで頻出するスライドの一部である。

表2 医中誌・看護索引・CiNiiArticles比較表

	医学中央雑誌	最新看護索引	CiNiiArticles
主題	医学・歯学・薬学・看護学	看護・周辺領域	社会科学、人文科学、一般
属性	抄録誌	索引誌	索引誌
収録年	1983年以降 (OLD1977年～1983年)	1987年以降	概ね1950年以降
アクセス	同時13(リモート可)	同時3(リモート可)	検索はどこからでも無料
本文	なし(リンクあり)	一部あり※	一部あり
データ量	約1000万件の論文情報	約213万件の論文情報	約1,800万件
	約6,000誌	約860誌	NII-ELS 約365万件 CJP 約200万件 NDL 約1,140万件 機関リポジトリ(IR) 100万件 J-STAGE 200万件
特徴	・医学用語シソーラス ・Mapping機能	日本看護学会論文集電子版	・膨大な論文情報 ・論文本文へのナビゲート ・論文の引用関係を表示

### 3 大学院生の利用者ガイダンス

大学院生に向けたものとして、修士1年生・選択科目『自然科学系研究方法論』では、更に高度な研究をすべく、抄録・引用文献データベース「SCOPUS」の使い方、インパクトファクター入手のため「JCR (Journal Citation Reports)」の紹介、文献管理ソフトの「EndNoteBasic」の説明を行なっている。本学の大学院は社会人を主なターゲットにしており、働きながら学べるように主に夜間に開講されている。

先に情報格差について言及したが、往々にして臨床経験が長い社会人が入学した場合、ICTの影響で日々進化する情報検索の現場からは長く離れていることを意味し、電子コンテンツとして記事検索から文献の入手まで、またILLの依頼までもパソコンで行える環境適用に時間を要したり、苦手意識を持つ場合が多いように感じられる。一方、学部生からそのまま大学院に進学した内部生は、ほぼ卒論を必修とする学科卒である場合は特に、その時点で高度な文献検索手法を習得する素地を持ち合わせており、ICTに関する嫌悪感は少ない。

しかしながら、文献検索の最終目的は参考文献を収集するにとどまらず、クリティークし、それを自身の論文に生かすことである。更に言えばその前に適切なキーワードを選ぶことであり、加えてその前に何が課題であるかのリサーチクエスチョンを適切に行うことの重要性を鑑みると、臨床の現場で解決すべき課題をもってして働きながらに大学院に入学した社会人院生においては、学部生が卒論を書く以上に、文献検索に対する適正、言葉を替えると強みをもっていても考える。

### V 今後検討している利用者サービス

これまで紹介してきたガイダンスの開催事例は、教員からの要請があり授業に組み込まれるなどして

いるものが多く、担当する図書館職員自身も毎年の経験を次年度のガイダンスに反映するなど経験値が上がっている。それ以外のものとしては自主的に申し込んできた少人数のグループ単位で講習会を開催するケース、電子ブックなど特定のデータベースについて事前申込みなく自由に参加できる形式の公開セミナーを開催するケースなどがある。後者の場合は会場をLCとして、外部講師に担当いただくことも多い。

以上が本学のガイダンス実施状況であるが、まだまだ課題も多い。例えば2年生である。この学年を対象としたガイダンスは行なわれていない。もしこの学年に文献検索スキルを教授できれば、在学中のレポート課題に役立つほか、3年生での卒研検索への橋渡しの役割を果たせることなど効果が期待できる。またデータベースの中には利用頻度の低いものが存在し、図書館職員さえもがうまく紹介できないコンテンツも存在する。これらは外部講師を招聘してガイダンスを実施することが、利用者のみならず図書館職員の勉強にもなりうる。企画を立てる労力を厭わないことが肝要と言える。

文献検索ガイダンスにおいて、私自身の持論として、「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教える(中国の有名な老子の格言で、中国語では『授人以魚不如授人以漁』)ことを意識している。大学図書館の最大の使命は「生涯通じる情報リテラシーの教授」であるとの考え方に依るものである。しかし、まずもって自戒である。その使命は果たしているか。また建学の理念「QOLサポーターの育成」に大学図書館は貢献できているか。先にみた入館数や貸出冊数、ILL依頼・受付数、電子ジャーナルの閲覧数は単純な数値の加算であり、いわば単なる経年の変化を見たものに過ぎない。いくら昨年に比べて入館者数や貸出冊数が増えたとしても、成果としてのアウトカムへの相関は証明されてはいないのである。単純な数値の増減で図書館の役割を果たしたとするのではなく、一つのガイダンスに際して、最善の準備を行い、現場ではいかなる事態(例えば機械トラブル)、質問があろうともその場で対処・回答できるよう図書館職員自ら常日頃のスキルアップを怠らないことが大切であると考ええる。

今後検討している利用者サービスとしては、利用者が求める時、求めるだけのサポートが行える環境の整備である。次年度改組を控えた本学にとっては更なるコンテンツ提供の支援であり、また例えばオンデマンド型の講習会やデータベースリモートアクセス環境の整備であると考ええる。

## VI 病院図書室への要望

本研修会への参加を前に刊行されたばかりの『病院図書館の世界(奥出麻里著、日外アソシエーツ、2017年)』を読んだ。医療現場の最前線で医師をはじめとする医療従事者から患者までを対象者とし、少人数で奮闘してきた病院図書館の歴史が描かれており、高く共感した。このような努力を積み重ねてこられている新潟県内の病院図書室への要望など、私から声高に発言することなど何もない。図書室協会の30年の歩みにただ頭が下がるばかりである。

ただ更なる今後のご発展のため、報告「30周年のあゆみ」をお聞きし、感じたことを一言言及させていただきたい。それは本研修のような病院図書館のネットワークを超えた連携や交流ができるのではないかということである。スタッフ同士の研修や勉強会であり、またコンテンツの相互利用である。超えるのは館種の違いをである。連携・交流は地域をまたいでである。実際、本学からの病院図書室へのアプローチはこれまで多くはなかった。しかし、本日の研修会に参加することで、新潟の病院図書室協会の長い歴史と伝統、結びつき、活動を知る機会を得た。また、本学の卒業生が病院に就職した際など、本学の利用者教育が少なからず関係していることを再認識した。

もし門戸を開いていただければ、本学との、また大学図書館との更なる連携・交流をお願いできればと思う。

## VII おわりに

今回の新潟県病院図書室協会30周年記念研修会にお招きいただきましたこと、御礼申し上げます。また、ご準備から当日の運営まで担当されましたスタッフの皆様にご心から感謝申し上げます。この先、40周年、50周年を迎えられますよう会のますますのご発展をお祈りしております。

(本稿は、第55回新潟県病院図書室協会30周年記念研修会の発表に加筆修正したものである)